

自然習得の恩恵

—日本語の短縮語復元課題における中国と日本の学習環境の比較—

柴崎秀子・玉岡賀津雄・母 育新

キーワード：自然習得，短縮語，日本語学習，中国語を母語とする日本語学習者，語彙習得

1. はじめに

音声的に長い表現や単語はその一部が省略されることがあり、それは短縮語と呼ばれる。最近のインターネットの書き込みや若い世代の会話などには、これまでにない短縮語の使用が頻繁に見られるようになってきた。例えば、「Googleで検索する」であれば「ググる」と言い、「家事手伝い」であれば「カジテツ」と短く表現する。このような新語は俗語や方言などと並んで、日本語教育で扱う機会の少ない領域である。その理由は、若者ことばや方言が教室の外で自然に習得されるものだと考えられているからであろう。外国語の習得方法には、教師から系統だったプログラムで指導される「教室習得」と、日常生活の中で覚え使い慣れていく「自然習得」がある。自然習得の特徴として、①自然習得は教室習得よりもインプットの量のはるかに多い、②自然習得の談話の型は多種多様である、③教室習得では限られた時間においてのみ母語話者の教師と接するが、自然習得では常に母語話者に囲まれている、などが挙げられている(Lightbown & Spada, 1999)。これらの指摘が妥当であるならば、自然習得の機会の多い学習者は教室習得のみの学習者よりも、日本語教科書が扱わない領域の知識が豊富だということになる

う。そこで、自然習得の恩恵を検討するために、中国だけで日本語を学習してきた中国語母語話者と、日本で日本語を学習した経験のある中国語母語話者を対象として、日本語教科書でほとんど扱われない語彙表現から新出の短縮語を取り上げ、そのもともとの表現や単語をどのくらい復元することができるかを比較することにした。

2. 短縮語の特徴

短縮語には以下のような特徴がある。第1の特徴は、語彙は「出生死滅過程(birth-and-death process)」を辿るという性質がある(Altmann, 1985; Tamaoka & Altmann, 2004; Wimmer & Altmann, 1995)ということである。つまり短縮語であっても、広く一般に使われることで定着した語、反対に狭い地域や特定の世代でしか認知されていない語、あるいはほとんど使われることがなくなった語があるということである。例えば、「マスコミュニケーション」の短縮語の「マスコミ」は『広辞苑(第五版)』(新村, 1998; 以下、『広辞苑』と記す)に掲載されており、定着した語と考えてよいであろう。

一方、『広辞苑』には掲載されていないが、『若者ことば辞典』(米川 1997)や『若者言葉事典』(亀井 2003)に紹介されているような、若い世代を中心に使われている短縮語もある。このような比較的新しいと思われる短縮語を収集するために、2005年1月から3月にかけてインターネットのチャットや若者ことばに関するウェブサイトを検索したところ、570の短縮語を見つけることができた。そして、それらの短縮語から以下のような特徴が観察された。まず、品詞では、動詞(例:「キョヒる」→「拒否する」, 「パニクる」→「パニックになる」, 「コクる」→「告白する」)と形容詞(例:「ジェラシい」→「ジェラシーを感じる」, 「キシヨい」→「気色悪い」, 「ハズい」→「恥ずかしい」)が増えているようだ。内容としては、①IT関係の語(例, 「イジメール」→「いじめのメール」, 「即レス」→「即座にレスポンスをする」, 「メルアド」→「メールアドレス」), ②ファッション関係の語(例:「ストパー」→「ストレートパーマ」, 「ロンゲ」→「ロングの毛」, 「アクセ」→「アクセサリー」), ③人物や立場に関する語(例, 「ハイソ」→「ハイソサエティー」, 「ヒッキー」→「ひきこもり」, 「シッタカ」→「知ったかぶりをする人」)などが増えている。また、これまでにない特徴としては、④固有名詞を使った短縮語(例:「スタバる」→「スターバックスへ行く」, 「よしぎゅう」→「吉

野家の牛井], 「ケンチキ」→「ケンタッキーフライドチキン」)が増えていることや、⑤単語レベルだけでなく、文や句の短縮表現(例:「きよぶた」→「清水の舞台から飛び降りたつもりで」, 「よさのる」→「与謝野晶子の作品『乱れ髪』のように髪が乱れている」, 「ごはさき」→「ご飯を先に食べますか」)も多く観察され、⑥携帯メールにおける短縮表現(例:「T・P」→「トイレットペーパー」, 「SSS」→「コンビニエンスストアのスリーエス」)なども観察された。これらの短縮語や表現はまだ『広辞苑』や新聞コーパスにも掲載はなく比較的新しいものと考えられるが、この中でどのような語が残り、どのような語が消滅していくのかは全くの未知数である。

第2の特徴は、短縮語が一定の規則を持って作られているということである。この規則とは、語尾音が消失する(例:「プロ」→「プロフェッショナル」, 「テレビ」→「テレビジョン」, 「ケイタイ」→「携帯電話」), 反対に語頭音が消失する(例:「バイト」→「アルバイト」, 「さつ」→「警察」, 「むしょ」→「刑務所」), 複数の単語の最初の2モーラを残す(例:「パソコン」→「パーソナル・コンピュータ」, 「東大」→「東京大学」)などであるが、これらの規則から、短縮語には元の語を想起させる情報を含んだ部分が残されている(窪蘭 2002)ことがわかる。以上のように、ウェブサイトから見つけた570の短縮語は、国語辞典等に掲載のない新しい語であるが、短縮される規則そのものは従来のものと変わらない。「イジメール」, 「即レス」, 「メルアド」, 「ストパー」などは、複数の語の最初の2モーラを残した形(ただし、長母音は1モーラと数える場合とそうでない場合がある)であり、「アクセ」, 「ハイソ」, 「ヒッキー」, 「シッタカ」などは語頭音を残した形である。形容詞についても、従来の規則が応用されている。例えば、「キショい」, 「ハズい」などは、形容詞の語頭音を残して「い」をつけて、形容詞にしたものである。このような短縮語は多く、「キモい」(気持ち悪い), 「カッコカワイい」(かっこよくて可愛い), 「キモカワイい」(気持ち悪いが可愛い), 「ムズい」(難しい), 「ウザい」(うざったい), 「メンドい」(面倒くさい), 「ギコい」(ぎこちない)などがある。また、動詞は、「スタバる」, 「コくる」などは、語頭音を残して「る」をつけた動詞が多く「キョドる」(挙動不審な動きをする), 「タクる」(タクシーで行く), 「コピる」(コピーする)などがある。

以上の特徴を踏まえると、短縮語を調査語として使うには、短縮語の新旧、規則の種類などを考慮する必要があることが分かる。

3. 調査の方法

3.1. 調査語の選択

日本語学習者の教室習得と自然習得の相違を見るために、前章で述べた短縮語の特徴を考慮し、調査語は以下の3つの条件で、合計32語を選択した。各語の意味や辞書掲載の有無などの詳細は、表1を参照のこと。

第1に、調査語は特定のものに偏らないように、定着した短縮語と新しい短縮語の両方を入れ、また新しい短縮語には短縮語形成の規則によって数種類を選択した。まず、定着した短縮語として、国語辞典と広辞苑に掲載のある「ソツロン」、「ニューシ」、「ツウハン」、「ジハンキ」、「バイト」、「マスコミ」、「パソコン」の7語を選んだ。このうち、「マスコミ」と「パソコン」は日本語能力試験出題基準にもある語である。次に、新しい短縮語として『広辞苑』に掲載のない25語を選んだ。2つの単語からなる語の語頭部分を残した語では「メリクリ」、「チュウキン」、「シュウカツ」、「アケオメ」、「アパマン」、「クラトモ」、「ノドカワ」、「タンプレ」、「ドコスミ」の9語、形容詞または動詞では、「ムズイ」、「キモイ」、「アブイ」、「コクル」、「ジコル」、「コピル」の6語、単語、複合語または句の前部を残した語からは、「マジ」、「オハ」、「オツ」、「ジコチュー」、「ケイタイ」、「イミフ」の6語、その他として「スッチー」、「ゴッチー」、「チワッ」の3語を選んだ。これらの23語は『広辞苑』だけでなく、『毎日新聞データ集』(毎日新聞社2003)においても「マジ」以外は出現頻度がゼロであった。

第2に、短縮語の復元課題を課すためには、短縮される前の元の語が、被調査者にとって、すでに学習したことのある語でなくてはならない。本調査で選んだ定着した短縮語7語の復元された語である「卒業」、「論文」、「入学」、「試験」、「通信」、「販売」、「自動」、「販売」、「アルバイト」はすべて日本語能力出題基準または初級の日本語教科書に掲載されていることを確認した。さらに、新しく作られた25の短縮語の復元された形である「難しい」、「クラス」、「友だち」、「まじめ」、「自己」、「中心」、「メリークリスマス」、「こんにちは」、「告白する」、「おはよう」、「お疲れさま」、「スチュワーデス」、「就職」、「活動」、「あげましておめでとう」、「タクシー」、「アパート」、「マンション」、「ごちそうさま」、「携帯」、「電話」、「事故」、「意味」、「不明」、「喉が渇く」、「コピーする」、「誕生日」、「プレゼント」、「どこ」、「住む」、「気持ち悪

表1 各グループにおける短縮語の復元正答者数、復元正答率および中国在中(教室習得)と短期在日(自然習得)の中国語を母語とする日本語学習者の母比率の差の検定

調査語	復元された形	『広辞苑』 の掲載	新聞コーパス の掲載	日本語母語話者群(n = 36)		中国在住群(n = 30)		短期在日群(n = 29)		カイ二乗値と 有意確率
				復元正答者数	復元正答率	復元正答者数	復元正答率	復元正答者数	復元正答率	
(1)日本語で定着した短縮語(『広辞苑』に掲載がある短縮語; n = 7)										
パソコン	パーソナルコンピュータ	○	○	36	1.00	17	0.57	16	0.55	$\chi^2(1) = 0.013, n.s.$
バイト	アルバイト	○	○	36	1.00	15	0.50	22	0.76	$\chi^2(1) = 4.218, p < .05$
ソツロン	卒業論文	○	○	36	1.00	15	0.50	21	0.72	$\chi^2(1) = 3.114, n.s.$
ジハンキ	自動販売機	○	○	36	1.00	5	0.17	9	0.31	$\chi^2(1) = 1.682, n.s.$
ニューシ	入学試験	○	○	34	0.94	3	0.10	11	0.38	$\chi^2(1) = 6.655, p < .05$
マスコミ	マスメッセージ	○	○	34	0.94	3	0.10	7	0.24	$\chi^2(1) = 2.094, n.s.$
ツウハン	通信販売	○	○	35	0.97	1	0.03	7	0.24	$\chi^2(1) = 5.445, p < .05^*$
(2)新しく作られた短縮語(『広辞苑』に掲載がない短縮語; n = 25)										
ケイタイ	携帯電話	×	○	34	0.94	15	0.50	22	0.76	$\chi^2(1) = 4.218, p < .05$
メリクリ	メリークリスマス	×	×	36	1.00	15	0.50	13	0.45	$\chi^2(1) = 0.158, n.s.$
オハ	おはよう	×	×	36	1.00	7	0.23	14	0.48	$\chi^2(1) = 4.002, p < .05$
マジ	まじめ	×	○	33	0.92	5	0.17	14	0.48	$\chi^2(1) = 6.748, p < .01$
ムズイ	難しい	×	×	36	1.00	4	0.13	5	0.17	$\chi^2(1) = 0.174, n.s.$
シュウカツ	就職活動	×	×	35	0.97	4	0.13	3	0.10	$\chi^2(1) = 0.126, n.s.$
オツ	お疲れ様	×	×	35	0.97	3	0.10	3	0.10	$\chi^2(1) = 0.002, n.s.$
ジコチュウ	自己中心	×	×	35	0.97	2	0.07	5	0.17	$\chi^2(1) = 1.577, n.s.$
ノドカワ	のどが渴いた	×	×	29	0.81	2	0.07	4	0.14	$\chi^2(1) = 0.820, n.s.$
クラトモ	クラスの友達	×	×	28	0.78	2	0.07	3	0.10	$\chi^2(1) = 0.257, n.s.$
スッチャー	スチュワーデス	×	×	36	1.00	2	0.07	2	0.07	$\chi^2(1) = 0.001, n.s.$
コピル	コピーする	×	×	36	1.00	2	0.07	2	0.07	$\chi^2(1) = 0.001, n.s.$
アバマン	アパートマンション	×	×	29	0.81	1	0.03	6	0.21	$\chi^2(1) = 4.248, p < .05^*$
キモイ	気持ち悪い	×	×	35	0.97	1	0.03	4	0.14	$\chi^2(1) = 2.080, n.s.$
アブイ	危ない	×	×	31	0.86	1	0.03	1	0.03	$\chi^2(1) = 0.001, n.s.$
アケオメ	あげましておめでとう	×	×	36	1.00	0	0.00	2	0.07	-
ゴッチャー	ご馳走様	×	×	25	0.69	0	0.00	2	0.07	-
チワッ	こんにちは	×	×	35	0.97	0	0.00	1	0.03	-
タクル	タクシーで行く	×	×	19	0.53	0	0.00	1	0.03	-
ジコル	事故を起こす	×	×	36	1.00	0	0.00	1	0.03	-
イミフ	意味不明	×	×	29	0.81	0	0.00	1	0.03	-
タンブレ	誕生日プレゼント	×	×	17	0.47	0	0.00	1	0.03	-
ドコスミ	どこに住んでいるの	×	×	21	0.58	0	0.00	1	0.03	-
コクル	告白する	×	×	36	1.00	0	0.00	0	0.00	-
チュウキン	駐車禁止	×	×	30	0.83	0	0.00	0	0.00	-

注1: 表1の『広辞苑』と「新聞コーパスの掲載」の○は掲載があること、×は掲載がないことを示す。

注2: カイ二乗分布を使った母比率の差の検定は、中国在住の30名の復元正答者数と復元誤答者数の比と日本在住の29名の復元正答者数と復元誤答者数の比を比べたものである。

注3: 母比率の差の検定の有意確率は、セルが5未満の場合にはFisherの直接法による両側の有意確率を使用した。これを適用して有意であった短縮語は'a'で示した。

注4: セルが0の場者は、母比率の差の検定はできないので、'-'で示した。

い]、「危ない」もすべて同基準および初級教科書に掲載されていることを確認した。

第3に、調査語は日本語母語話者が復元できない語であってはならない。そこで調査の前に、母語話者が32の短縮語を正しく復元できるかどうかを確かめるために、日本人大学生36名(男性16名、女性20名)に短縮語復元課題を行った。新しい短縮語の知識や使用は世代差や地域差の影響を受けることが考えられるので、日本人大学生の年齢は20歳前後、東京または東京近辺に住んでいることを条件とした。

平均年齢は20歳5ヶ月(18歳から22歳)であり、東京、埼玉、千葉、茨城での平均在住期間は16年9ヶ月(36名中31名が東京在住)であった。課題の結果、短縮語の復元正答率は、27語については80%から100%であった。比較的低かったのが、「クラトモ」の78%、「ゴッチー」の69%、「ドコスミ」の58%、「タクル」の53%、「タンプレ」の47%の5語であったが、それでも50%を下回ることはなかった。全体的にみて復元正答率が高かったため、これら32語すべてを調査に使うことにした。

3.2. 調査の対象

日本語の自然習得の恩恵を観察するためには、調査の対象となる学習者は中国と日本という異なる学習環境にしながら、日本語学習期間と日本語能力がほぼ同じである必要がある。

中国で日本語を学習しているグループとしては、中国の西安外国語大学の2年生に在学して日本語を学習している学生を30名(女性25名、男性5名)選び、このグループを「中国在住群」とした。中国在住群は中国国内だけで日本語を学んできたので、教室習得が主であると考えられる。一方、日本で日本語を学習しているグループとしては、東京在住で、在日期间が12ヶ月から35ヶ月になる29名(女性16名、男性13名)を選び、このグループを「短期在日群」とした。短期在日群は日本に来てから日本語の学習を始めた人たちに限定したが、在日してから1年以上経っているので、日本語学校や大学だけでなく日常生活においても様々な日本語に触れ、教室習得と自然習得の両方の方法で日本語を習得していると考えられる。また、短縮語の知識や使用には世代差や生活環境が影響することが予想されるので、両群とも19歳から28歳までの年齢に限定した。

3.3. 中国在住群と短期在日群の日本語学習期間と日本語能力の統制

中国在住群と短期在日群の短縮語の復元正答数を比較するために、両グループの日本語学習時間と日本語能力が等質であるように統制した。中国在住群と短期在日群の学習時間と日本語の語彙・文法能力テストの平均、標準偏差、両グループの差および t 検定の結果は表 2 に示した通りである。

まず、両群の日本語の平均学習時間については、中国在住群が 16.97 ヶ月、短期在日群が 17.69 ヶ月であり、その平均の差は、0.73 ヶ月である。平均学習期間については、Levene の検定で両グループが等分散でないことが分かったので、等分散を仮定しない独立したサンプルの t 検定を行った。そのため自由度は、34.26 である。分析の結果、両グループの学習期間には有意な差がないことが示された [$t(34.26) = 0.598, n.s.$]。

表 2 中国在住および短期在日群の平均学習期間と語彙・文法テストの結果

日本語の学習環境の違い	平均学習期間(月)		語彙・文法テスト(点)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
中国在住群(教室習得)	16.97	2.11	24.97	5.24
短期在日群(自然習得)	17.69	6.17	27.17	7.81
差(短期在日 - 中国在住)	△ 0.73		△ 2.20	
t 検定の結果	$t(34.26) = 0.598, n.s.$		$t(57) = 1.269, n.s.$	

注 1: 中国在住群は 30 名、短期在日群は 29 名である。

注 2: 平均学習期間は、何ヶ月学習しているかで示した。

注 3: 語彙・文法テストは、50 点満点である。

注 4: 平均学習期間については、Levene の検定で等分散でないことが分かったので、等分散を仮定しない t 検定を行った。そのため自由度が、34.26 となっている。

次に、短縮語の復元課題の成績に差があるのならば、その成績の差は日本語能力に起因することが考えられる。そこで、語彙・文法四者択一のテスト(50 問で 50 点満点)を実施した。実施時間は約 50 分である。語彙・文法テストは、中国在住群の平均点が 24.97 点、短期在日群の平均点が 27.17 点であり、その差は、2.20 点であった。Levene の検定で両グループの等分散であることが確認できたので、等分散を仮定する独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、得点の差は有意ではなかった [$t(57) = 1.269, n.s.$]。

以上の結果、この両グループの学習時間数および日本語能力には差がない

ことが分かった。そこで、中国と日本という学習環境で、両グループの短縮語の復元正答数を比較し、自然習得の効果を観察することにした。

3.4. 調査の方法

調査の対象となる日本語学習者を中国語母語話者としたので、調査語の表記は漢字を避け、「ソツロン」、「ニューシ」などのように、すべて片仮名表記にした。調査は質問紙によって行ったが、32種類の短縮語の元の形を書く課題で、短縮語の部分以外はすべて中国語に翻訳した。調査期間は2005年6月から8月であった。制限時間は設定しなかった。

4. 短縮語の復元課題正答者数および正答率の分析の結果と考察

まず、中国在住群と短期在日群の復元正答数の平均を t 検定でグループ間比較を行った(被験者間の分析)。次に、個々の短縮語ごとに復元正答者数についてカイ二乗分布を利用した母比率の差の検定を行った(項目ごとの分析)。さらに、32種類の短縮語を全体的に考察するために、復元正答率をもとにクラスタ分析を行った(項目の全体的な類似性の分析)。

4.1. 中国在住群と短期在日群についてのグループ間比較

正しく復元できた語を1点として数え、日本語学習者ごとに合計した。全数の32語、定着した短縮語の7語、新しい短縮語の25語での平均、標準偏差、両グループの差および t 検定の結果は、表3に示した通りである。

表3 中国在住および短期在日群の短縮語の復元正答数の平均と標準偏差およびt検定の結果

日本語の学習環境の違い	短縮語全体($n = 32$)		定着した短縮語($n = 7$)		新しい短縮語($n = 25$)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
中国在住群(教室習得)	4.17	3.88	1.97	1.69	2.20	2.44
短期在日群(自然習得)	7.03	4.98	3.21	1.99	3.83	3.36
差(短期在日-中国在住)	$\Delta 2.87$		$\Delta 1.24$		$\Delta 1.63$	
t検定の結果	$t(57) = 2.472, p < .05$		$t(57) = 2.583, p < .05$		$t(57) = 2.134, p < .05$	

注: Leveneの検定で等分散であることが確認できたので, 等分散を仮定したt検定を行った。

まず短縮語の32語全体の成績では, 中国在住群の平均点が4.17点, 短期在日群の平均点が7.03点で, その差は2.87点であった。Leveneの検定で両グループの等分散が確認できたので, 等分散を仮定する独立したサンプルのt検定を行った。その結果, 得点の差は有意であった [$t(57) = 2.472, p < .05$]。また, 定着した短縮語の7語については, 中国在住群の平均点は1.97点で, 短期在日群の平均点は3.21点であり, その差は1.24点であった。やはり等分散であることが確認できたので, 独立したサンプルのt検定で分析したところ, 両者の平均点には有意な差がみられた [$t(57) = 2.583, p < .05$]。さらに, 新しい短縮語である25語についても, 中国在住群の平均点は2.20点で, 短期在日群の平均点は3.83点であり, その差は1.63点であった。同様に等分散であることが確認できたので, 独立したサンプルのt検定で分析したところ, 両者の平均点には有意な差がみられた [$t(57) = 2.134, p < .05$]。

以上の分析の結果, 短縮語全体, すでに定着している短縮語, 新しい短縮語, すべての復元課題の得点条件で, 短期在日群の成績は中国在住群よりも優れていることが分かった。中国在住群の学習環境が教室の中に依存することが多いのに対して, 短期在日群は教室習得と自然習得の両方を兼ね備えている。日本語の教科書でほとんど扱われないような短縮語は教室の中でも扱われることは少ないので, この結果から短期在日群が自然習得から強い恩恵を受けていることを示しているといえよう。

4.2. 短縮語ごとの正答者数の分析

短縮語復元課題において, 32種類のうちのどの短縮語において短期在日

群が中国在住群よりも優れているのかを調べるために、両グループの各短縮語における正答者と非正答者の比率について、ノンパラメトリック分析であるカイ二乗分布を使った母比率の差の検定を行った。短縮語の復元課題の正答者数、正答率およびカイ二乗値と有意確率は表1に示した通りである。なお、2(学習環境：中国在住，短期在日)×2(正答者数，誤答者数)の4つの変数のいずれかに0がある場合には、分析ができないので、表1には‘—’で示している。また、4つのセルの内、5未満のセルがある場合には、Fisherの直接法による両側の有意確率を使用した。これを適用して有意であった短縮語は、表1のカイ二乗値の後に‘a’で示した。以下、分析結果を定着した短縮語と新しい短縮語を別々に報告する。

4.2.1. 定着した短縮語についての分析

日本語に定着した短縮語7語のうち「バイト」 $[\chi^2 = (1)4.218, p < .05]$ 、「ニューシ」 $[\chi^2(1) = 6.356, p < .05]$ および「ツウハン」 $[\chi^2(1) = 5.445, p < .05]$ の3語が有意であった。つまりこの3語については、日本に在住して日本語を学習する方が、中国で日本語を学習するよりも短縮語復元課題の成績が良いということである(復元正答者数と復元正答率の詳細は表1を参照)。日本では留学生がアルバイトをしているケースが多く、アルバイトの短縮語である「バイト」は、日常生活で頻繁に聞くのだろう。また、日本の大学で学ぶためには入学試験は避けられないので、「ニューシ」という短縮語も使われることが多いと推測される。通信販売の「ツウハン」も、インターネットやテレビ等でよく使われる言葉であり、自然習得の効果が大きい短縮語であると思われる。また、一方で、パーソナルコンピュータの短縮形である「パソコン」や卒業論文の「ソツロン」が両グループでともに復元の正答者数が多かったのは、被調査者が学生であり年齢も近いことが関係していると考えられる。

4.2.2. 新しい短縮語についての分析

新しい短縮語は25語あるが、基本的にこれらの短縮語は復元が難しいようである。実際、表1に‘—’で示したように、中国在住群または短期在日群のいずれかで復元正答者がゼロであった項目が10語もあった。これらは、「アケオメ」、「ゴッチー」、「チワッ」、「タクル」、「ジコル」、「イミフ」、「タンプレ」、「ドコスミ」、「コクル」、「チュウキン」であり、両グループと

もに正答者が2名以下の短縮語であった。若い世代の日本語母語話者が「アケオメ」、「ジコル」、「コクル」の3語で全員正答していることを考えると、これらの短縮語は、日本の若い世代の会話でかなり頻繁に使われるスラング的な表現であると思われる。しかし、学習者にとっては、日本語母語話者と緊密な会話をするような機会が多くなければ、知ることは少ないのではないかと思われる。

「メリクリ」は、両グループともに復元正答者数が多かった。これは、韓国の歌手 BoA がこのタイトルの曲(2004年12月1日発売, CD シングル, AVCD-30630, 「メリクリ」を含む3曲を収録)をヒットさせたことで、中国でも日本でも日本語学習者に馴染みがあったのであろう。その意味では、両グループともに自然習得の恩恵のある数少ない短縮語の1つといえよう。両グループで有意な違いがみられなかったものはすべて正答者数が両グループともに5名以下で、「ムズイ」、「シュウカツ」、「オツ」、「ジコチュウ」、「ノドカワ」、「クラトモ」、「スッチー」、「コピル」、「キモイ」、「アブイ」であった。これらは、両グループ共に、馴染みのない短縮語といえよう。

中国在住群と短期在日群で有意であったのは、「ケイタイ」 $[\chi^2(1) = 4.218, p < .05]$ 、「オハ」 $[\chi^2(1) = 4.002, p < .05]$ 、「マジ」 $[\chi^2(1) = 6.748, p < .01]$ および「アパマン」 $[\chi^2(1) = 4.248, p < .05]$ の4語であった。いずれも、中国在住群よりも短期在日群の方が復元正答者数が多いことを示している。「ケイタイ」の復元率が両群で高いのは、携帯電話が若い世代に広く浸透しており、生活に密着したものであることが起因しているのではなかろうか。また、「マジ」のもともとの形は「まじめ」であるが、最近では「本当」や「本気」などの意味で使われるようになり、元の形を残していない。この表現が若者の間で頻繁に使われているため、日本語学習者もよく耳にするのであろう。また、「オハ」については、一時期テレビタレントに頻繁に使われたことがあったので、若い世代に良く知られ、日本語学習者も日常会話で聞くことがあったと推測される。このようなテレビタレントや歌の影響が、母語話者だけでなく、学習者にも観察されることは興味深い。

4.3. 短縮語全体の類似性の分析

中国在住群と短期在日群の短縮語復元正答数について、短縮語全体の類似性を検討した。短期在日群と中国在住群の復元正答者数を各グループの全成

員数で割り正答率とした。日本語母語話者を含む復元正答率を図1に示した。この数値を使って、クラスタ間の距離はワード法、短縮語の距離は平方ユークリッド距離を使用して、クラスタ分析を行った。

クラスタ分析の結果、最高値(rescaled distanceの値)の25ポイントで全体が大きく2つに分類された。それらは、復元正答率の高い順に並べた折れ線グラフの配列と一致するので、クラスタ分析結果から表示されるデンドログラムは省略し、図1に折れ線グラフで示した。分類Iは、「バイト」(中国在住群：50%，短期在日群：76%)，「ケイタイ」(中国在住群：50%，短期在日群：76%)，「ソツロン」(中国在住群：50%，短期在日群：72%)，「パソコン」(中国在住群：57%，短期在日群：55%)，「オハ」(中国在住群：

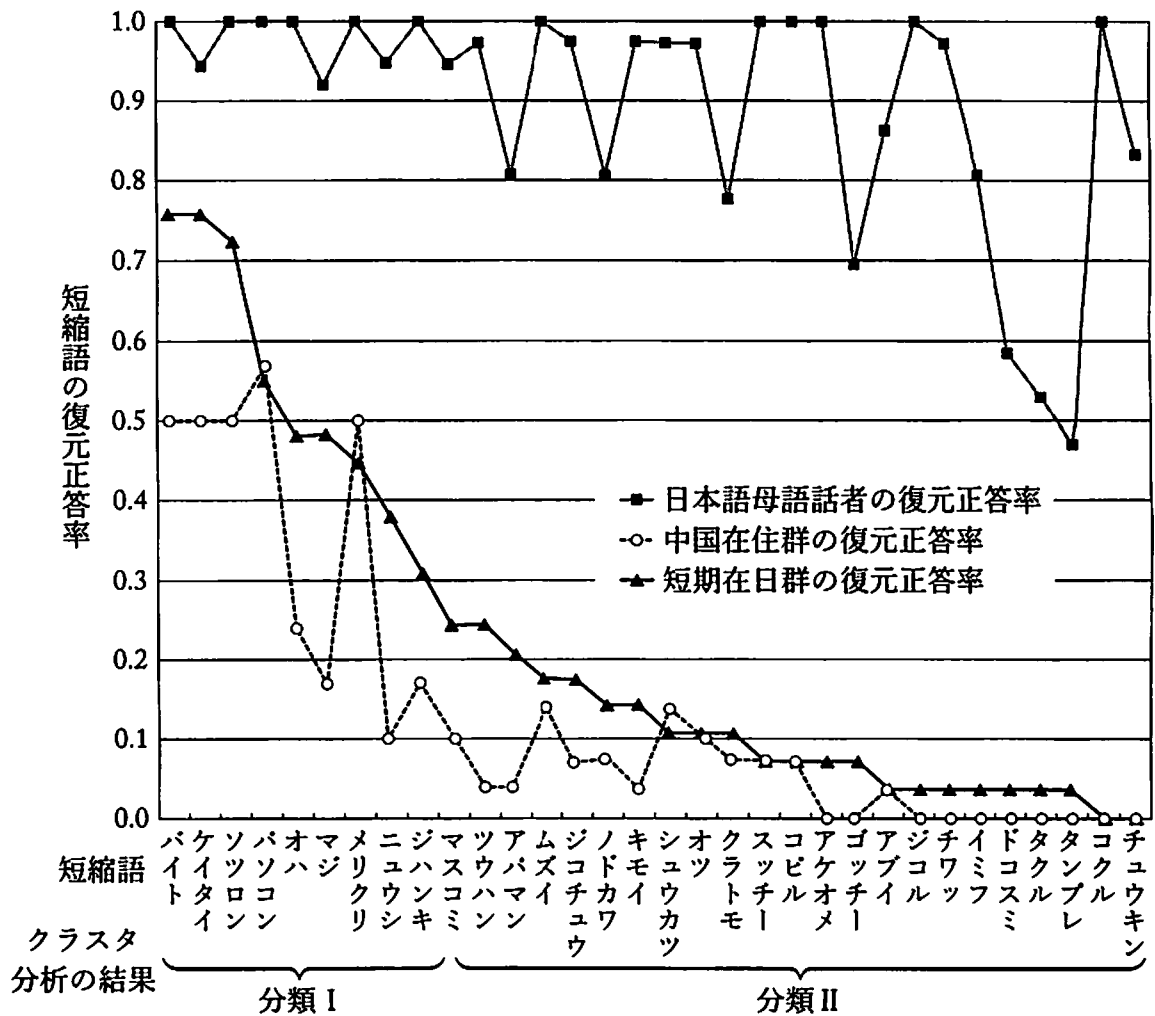


図1 日本語母語話者，中国在住群，短期在日群の短縮語別にみた復元率の動向とクラスタ分析の結果

注1：復元正答率とは、各グループの復元正答者数を全成員数で割った数値である。

注2：クラスタ分析では、クラスタ間の距離はワード法、短縮語の距離は平方ユークリッド距離を使用した。

23%, 短期在日群: 48%), 「マジ」(中国在住群: 17%, 短期在日群: 48%), 「メリクリ」(中国在住群: 50%, 短期在日群: 48%), 「ニューシ」(中国在住群: 10%, 短期在日群: 38%) 「ジハンキ」(中国在住群: 17%, 短期在日群: 31%) の9語であり, 両グループともに比較的正答率が高かった短縮語であるといえよう。分類Ⅱの23語は復元正答率が25%を下回っており, 短期在日群の方が中国在住群よりも有意に正答者数が多かった「ツウハン」と「アパマン」が含まれているが, 全体としてみるとあまり馴染みのない短縮語といえよう。

新しい短縮語の中の形容詞と動詞の形のものは, いずれも分類Ⅱに属する。形容詞の「アブイ」, 「キモイ」, 「ムズイ」, 動詞の「コピル」, 「ジコル」, 「コクル」の正答率が日本語母語話者はほぼ100%であるのに対して, 日本語学習者の正答率は短期在日群も中国在住群も共通して非常に低い。このことは, これらの語が新しい短縮語の中でも特に新しいものであり, 学習者にとってまだ認知されていないことを示唆している。

5. まとめ

本研究の目的は, 日本語学習者の自然習得の効果を観察することであった。中国だけで日本語を学習してきた中国語母語話者は教室習得が学習の中心となると思われる。それに対して, 日本で日本語を学習してきた中国語母語話者は, 日常生活でも日本語に接する機会が多いので, 教室習得ばかりでなく自然習得の機会にも恵まれているはずである。そこで, 日本語教科書でほとんど扱われない語彙表現から, 定着した短縮語7種類と新しく作られた短縮語25種類の合計32語について, 復元課題を実施した。その結果, 短縮語全体, 定着した短縮語, さらに新しい短縮語のすべての条件で短期在日群が中国在住群よりも復元正答者数が多かった。本研究では, 短期在日群と中国在住群の日本語能力(語彙・文法テストの成績)と日本語学習期間に有意な違いがないように統制した。それにも関わらず, 短縮語復元課題において短期在日群が中国在住群よりも成績が良いということは, 短期在日群には教室習得にプラスされた学習が加わっているからではないかと考えられる。本研究では, 短期在日の学習者は, 教室の学習が中心である中国在住の学習者よりも, 日本語教科書が扱わない短縮語の理解において自然習得の恩恵を強く受けていることを示した。

32種類の個々の短縮語について検討した結果、短期在日群の方が中国在住群よりも復元正答者数が有意に多かったのは、定着した短縮語では、「バイト」、「ニューシ」、「ツウハン」の3語で、新しい短縮語では「ケイタイ」、「オハ」、「マジ」、「アパマン」の4語であった。実際、これの短縮語は日本の生活の中で頻繁に登場してくるように思われる。例えば、日本に住むにはアパートやマンションを賃貸する必要があるので「アパマン」という短縮語を見聞きする機会があるであろう。また、日本語学校や大学に通いながらアルバイトをしている留学生が多いことを考えると、「バイト」は頻繁に使われる短縮語と予想される。また、インターネットなどで買い物をする経験から「ツウハン」を学習することも容易に推測される。このような短縮語は、教室よりも、日常生活で自然に習得される機会が多いであろう。また、新しい短縮語である「マジ」や「オハ」は、会話での挨拶言葉として使われるので、日本に住む留学生にとって良く耳にする表現であろう。以上のように、日常生活で頻繁に見聞きされる短縮語が、自然に習得される機会が多いということが、本研究により実証された。

参考文献

- Altmann, G.abriel (1985) Die Entstehung diatopischer Varianten-Ein stochastisches Modell. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 4, 139-155.
- 亀井 肇(2003)『若者言葉事典』日本放送出版協会.
- 窪園晴夫(2002)『新語はこうして作られる』岩波書店.
- Lightbown, Pasty and Nina Spada (1999) *How Languages Are Learned*. Revised Edition. Oxford: Oxford University Press.
- 毎日新聞社(2004)『毎日新聞データ集 2003 年度版』日外アソシエーツ.
- 新村 出(1998)『広辞苑(第五版)』岩波書店.
- Tamaoka, Katsuo and Gabriel Altmann (2004) Symmetry of Japanese kanji lexical productivity on the left-and right-hand sides. *Glottometrics*, 7, 68-88.
- Wimmer, Gejza and Gabriel Altmann (1995) A model for morphological productivity. *Journal of Quantitative Linguistics*, 2, 212-216.
- 米川明彦(1997)『若者ことば辞典』東京堂出版.

参考 URL

教えて！Goo <http://oshiete1.goo.ne.jp/kotaeru.php3?q=353011>

甲南大学キャンパスことば辞典

<http://ha8.seikyou.ne.jp/home/wexford/newpage100.htm>

コギャル用語集 <http://www.educ.ls.toyaku.ac.jp/~s967077/kogyaru.html>

ちょ～はやり語講座

http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Icho/2163/hphayari_titl.html

若者用語の裏知識 <http://www2.famille.ne.jp/~maps/kotoba/wakamono.htm#dai1>

若者用語・使ってる？辞典 <http://www.tnk.gr.jp/search/young/>

すっきゃねん若者ことばの会

<http://ha8.seikyou.ne.jp/home/wexford/11joshidaiseikaiwa.htm>

女子大生用語の基礎知識

<http://homewww.osaka-gaidai.ac.jp/%7ekoyano/joshidai93.htm>

—————(柴崎)長岡技術科学大学
(玉岡)広島大学
(母)西安外国語大学

Abstract**Benefits of Natural Acquisition: A Contrastive Study of Chinese and Japanese Learning Environments Regarding Restoration of Japanese Shortened Words**

Hideko Shibasaki, Katsuo Tamaoka, and Yuxin Wu

The present study investigates the restoration of 32 different shortened words (*tanshuku-go* in Japanese) by two groups of native Chinese speakers, one learning Japanese in Japan and the other in China, keeping the lexical and grammar knowledge of these two groups the same. Results indicate that native Chinese speakers learning Japanese in Japan could restore original words from shortened words better than those learning Japanese in China. Since the shortened words used in the present study are not usually taught in formal classroom environments, the results imply that those who studied or are studying within Japan must acquire these shortened words through natural (or incidental) acquisition. This tendency was observed especially among shortened words used in daily life such as *baito* 'part-time work', *nyushi* 'entrance examination', *tsuhan* 'mail-order business', *keitai* 'a cellular phone', *oha* 'Good morning', and so on. Shorted words commonly restored by learners both in Japan and in China were those encountered in popular television programs and songs (e.g. *merikuri* 'Merry Christmas').

レキシコンフォーラム No.3

発行 2007年7月2日 初版1刷

定価 4800円＋税

編者 © 影山太郎

発行者 松本 功

装丁者 平井正義

印刷所・製本所 三美印刷株式会社

発行所 株式会社 ひつじ書房

〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2-2F

Tel. 03-5319-4916 Fax. 03-5319-4917

郵便振替 00120-8-142852

toiawase@hituzi.co.jp

<http://www.hituzi.co.jp>

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、
小社かお買上げ書店にておとりかえいたします。

ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下されば幸いです。

ISBN978-4-89476-373-9 C3081
